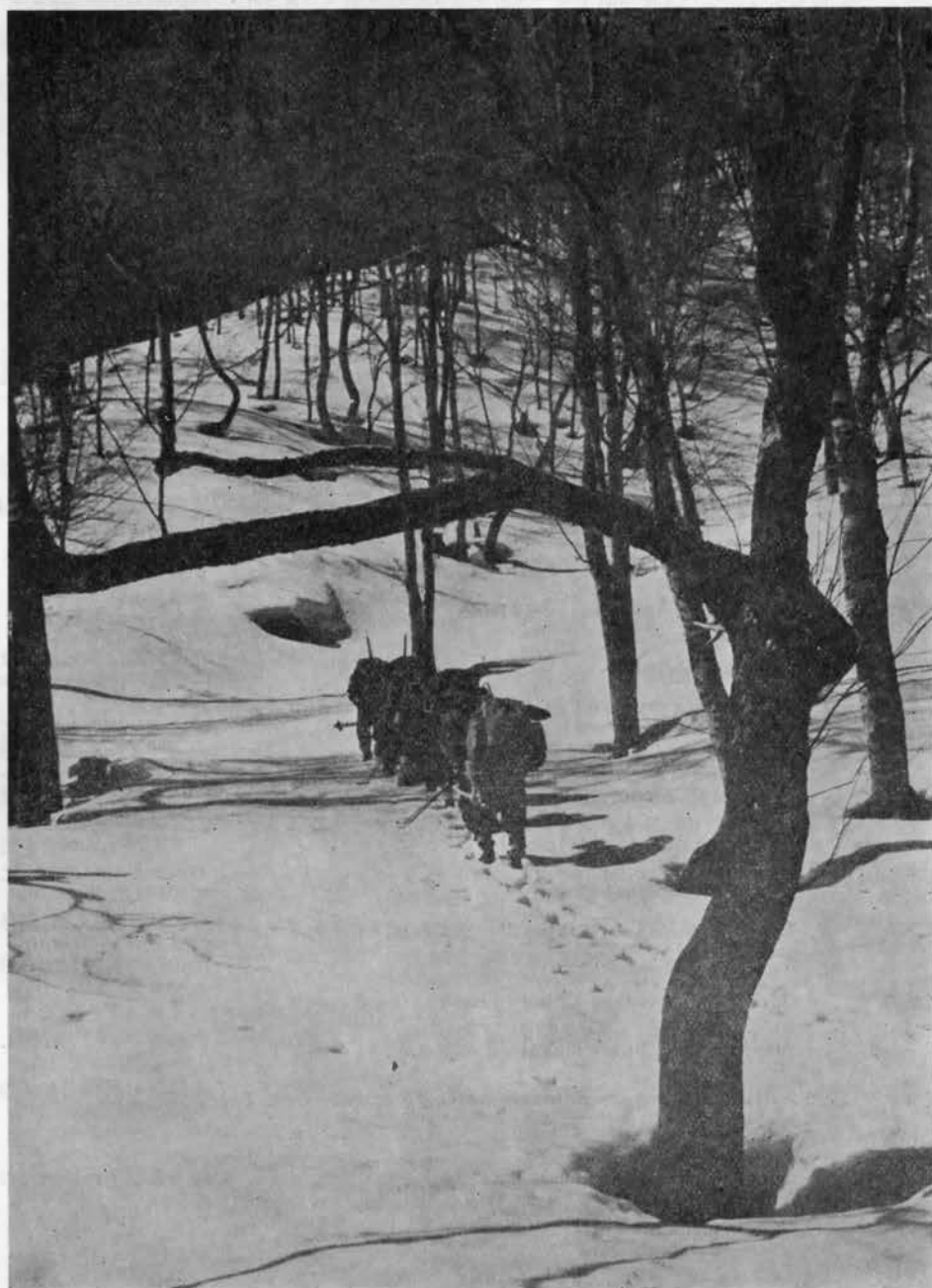


山と博物館

第5巻

第3号

1960年3月25日



春山を行く

三月下旬といえども北アルプスの山に一步入ると雪又雪がある。しかし厳冬の山に比べると、何かしら暖たかいものが感じられる。

大町山岳博物館

山岳名を冠した植物(1)

寺島虎男

植物名の頭に山岳名を付加したものについて全国的に調べてみたところ、一応まとまったので、ここに各山脈、山岳ごとに分けて列記を試みた次第である。紙面の都合上植物個々の解説を詳かにできないが、備考らんに幾分特記もしておいた。植物研究家は勿論アルビニストには、その山岳との結びつきの特別植物を知ることにより、その山岳に対する親近度を深めたり、情趣を豊にする上に必や一役を果す事ができるであろう。相当の数にのぼる為、三、四回位に分けて連載させていただきたい。山岳名は冠しても全部がその山岳の特産と云うわけではなく、多くはその山岳で最初の発見と云う事に依るものである。植物命名者はその学名中に知る事もできるが、発見者となると手許に資料が無いので、多くは記載できぬのを遺憾とする。同一種の植物であつてもAとBとの山岳異名を冠したものが、中に10位あるが、これは上述の理由からで、了承されたい。

第1. 中部山岳の植物

A. 日本北アルプス(飛騨山脈)

⊖ 白馬岳(大連華山) 2933.1m

No.	種名	学名	科名、属名	備考らん
1.	シロウマオトギリ	<i>Hypericum Asahina</i> , Makino Uar. <i>Siroumense</i> Y. Kimura	おとぎり、オトギリソウ	
2.	シロウマアカバナ	<i>Epilobium Siroumense</i> Matsumura et Nakai	あかばな、アカバナ	△特産種 亜高山帯の溪側 黒褐色及び白色毛を生ずる 明治34.8矢沢米三郎氏発見
3.	シロウマオウギ	<i>Astragles Siroumensis</i> Makino	まめ、ゲンゲ	
4.	シロウマレイジンソウ	<i>Lycotconum Siroumense</i> Nakai	おだまき、トリカブト	
5.	シロウマリンドウ	<i>Gentiana Yabei</i> M.A.	りんどう、リンドウ	△特産種、高山裸地、白花 ガク花冠共四裂
6.	シロウマタンポポ	<i>Tarexacum alpicola</i> Kitamura Var.	きく、タンポポ	総苞片は通常小角突起あり、 適湿地
7.	シロウマツガザクラ	<i>Phyllodoce hybrida</i> Nakai	つつじ、ツガザクラ	間種、コツガザクラ× ツガザクラ 葱平に多い。 特有の臭気あり。
8.	シロウマアサツキ	<i>Allium Maximowiczii</i> Regel	ねぎ	
9.	シロウマゼキシヨウ	<i>Juncus triceps</i> . L.	いぐさ、イグサ	花は3、薹は卵形種子は両端 に白色の付属体あり2mm
10.	シロウマチドリ	<i>Platanthera hyperborea</i> Lindley Var. <i>Makino</i> Takeda	らん、ミズチドリ	△特産種 距はやや内曲して、唇 弁と同長、高山帯の湿潤地 ハクサンフクロと同一 葱 平にお花畑に多産湿潤陽地
11.	シロウマフクロ	<i>Geranium Yesoense</i> Fet S. Var. <i>nipponicum</i> Nakai.	ふうろうそう、フウロソウ	
12.	シロウマスゲ	<i>Carex scita</i> M axim Var. <i>bcevisquama</i> (Koidy) Ohwi	かやつりぐさ、スゲ	△特産種 アンボソスゲとも云う
13.	シロウマウスユキソウ	<i>Leontopodircm japonicum</i> Miq. Var. <i>shiroumense</i> Nakai	きく、キク	ウスユキソウの高山に生じ て短縮した形のもの
14.	シロウマナズナ	<i>Draba Siroumana</i> Makino	あぶらな、イヌナズナ	種子、縁辺鈍く、付属体を有 せず長さ1-1.5mm 高山帯の乾燥しない岩石地
15.	シロウマヒメスゲ	<i>Carex melanocarpa</i> Cham	かやつりぐさ、スゲ	△特産種 マイオスゲとも云う
16.	ハクバブシ	<i>Aconitum Kishidai</i> Nakai	おだまき、トリカブト	白馬をハクバと呼称して冠 した名称は珍らしい
17.	レンゲイワヤナギ	<i>Salix Nakamuraana</i> Koidzmi	やなぎ、ヤナギ	白馬岳の異名としてのレン ゲ岳所産の植物
⊖ 雪倉岳2610m				
1.	ユキクラヌカボ	<i>Sanguisorba Stipulata</i> Var. <i>Kisinami</i> Hara	いね、コマクサ	越後及びその接続地の深山 に稀産
2.	ユキクラトウチソウ	<i>Sanguisorba</i> R. Var <i>Kisinami</i> , Hara	ばら、ワレモコウ	

- ㊦ 大日岳 (小蓮華山) 2768.8m
- ダイニチアザミ *Cacalia Babanum* Koidzumi きく、アザミ 茶の裂片は5対で隔離、頭花は長梗ありて単生、総苞反曲
- ㊦ 檜ヶ岳 3179.5m
1. ヤリガタケナズナ *Draba Sakurii* Makino あぶらな、ナズナ ミヤマナズナと同一種、花白径9mm 果実短角は平で少しねぢれる
2. ヤリガタケハタザオ *Arabis Tanakana* Makino? あぶらな、ハタザオ クモイハタザオを多分云うかと思う?
- ㊦ 穂高岳 北穂2990m 洞沢3103m
1. ホタカスゲ *Carex Hotakaensis* H.Koidzumi かやつりぐさ、スゲ 小泉秀夫氏発見
2. ホタカイワベンケイ *Rhodiola Hideoi* Nakai べんけいそう、ベンケイソウ 同上
- ㊦ 乗鞍岳 剣ヶ峯3028m
- ノリクラアザミ *Cacalia torikurense* Nakai きく、コウモリソウ 根葉は花時0 葉の下面は密毛あり雪白、総苞粘着せず
- ㊦ 御 嶽3063m
1. オンタケブシ *Aconitum metazaponicum* Nakai おだまき、トリカブト 花期は晩夏より初秋 花は濃董碧色
2. オンタケザサ *Sasa megalogluma* Nakai たげ、ササ
3. ミタケガヤ *Ancistrockloa Fauriei* Honda いね、カニツリノガリヤス カニツリノガリヤスと同一種
4. ミタケスゲ *Carex Michauxiana* かやつりぐさ、スゲ
5. オンタケナズナ *Draba Sakurii* Makino
Var. *ondakensis* Takeda あぶらな、ナズナ タカネナズナ クモマナズナと同一品 かなり繊細で毛が少く、種子の附属体は短い
- B. 日本中央アルプス (木曾山脈、木曾駒ヶ岳山麓)
- ㊦ 西駒ヶ岳 (木曾駒) 2956m
1. キソコマフタバラン *Listera cordata* R. Brown Form
appendiculata Honda. らん、フタバラン 花比較的小形葉巾広いタイプ コフタバランの一品種
2. コマガタケスグリ *Ribes japonicum* Maximowicz すぐり
3. コマウスユキソウ *Leontopodium Shinanense* Kitamura きく、キク ヒメウスユキソウと同一、高さ4-6cm 果実無毛、頭花、2-3 葉の両面灰白綿毛、苞葉6-9
- C. 八ヶ岳山脈
1. ヤツガタケシノブ *Cryptogramme Stelleri* Prantl しのみ、シノブ 明治40.7牧野富太郎、矢沢米三郎両氏の発見 2-4cmの小形種、本山岳の他は南アルプスだけ
2. ヤツガタケキンボウゲ *Ranunculus Yatsugatakensis* Honda et Kumasawa きんぼうげ、キンボウゲ 掌状に5-9深裂、茎葉は3全裂、花1個、長梗径6-8mm 花弁はガク片の約1.5倍
3. ヤツガタケナヅナ *Draba Oiana* Honda あぶらな、ナヅナ 茎葉は広披針形全辺か牙齒少々、種子は約1mm尾状物を欠く、短角7-10mm
4. ヤツガタケアザミ *Cacalia nipponicum* Makino
Var. *Yatsugatakense* Kitamura きく、アザミ 中葉は長鋭尖頭、羽状裂片は4-6対 5-10mmの刺針両面羽毛、頭花巾2.5-3cm
5. ヤツガタケムグラ *Galium triflorum* Michaux あかね、ヤエムグラ 4稜上に逆刺を疎生、6葉輪生 下面中肋に逆刺あり、分果は長い鈎刺を生ず
6. ヤツガタケタンポポ *Toraxacum Yatsugatakense* H. Koidzumi きく、タンポポ 葉はやや直立生、倒披針形 羽状中裂の深裂、総苞片は外側のものは甚短く内片の1/2
7. ヤツガタケトウヒ *Picea Koyamai* Shirasawa もみ、モミ 樹皮赤褐色で白粉を多少おびる、葉の長さ8-12mm 上面に2条の白色の気孔帯あり、毬果短円柱形鱗片は円形、淡褐色

D. 日本南アルプス (赤石山脈)

⊖ 赤石岳 (3120.1m)

1. **アカイシトリカブト** *Aconitum heptapetalum* Nakai おだまき科、トリカブト属
2. **アカイシヒヨウタンボク** *Lonicea Mochizukiana* Makino *Var. filiformis* Koidzumi すいかずら科、スイカズラ属 葉の上面光沢あり、苞は糸状で腺ありガクの裂片は細く子房と同長、小苞に腺あり
3. **アカイシコウゾリナ** *Picris hieracioides* Linn *Var. Akaisiensis* Kitamura きく、コウゾリナ
4. **アカイシコウモリ** *Caealia Koidzumiana* Kitamura きく、コウモリソウ
- ⊖ 荒川岳3040m
1. **アラカワオウギ** *Astragalus Arakawaensis* まめ、ゲンゲ シロウマオウギと同一種
2. **アラカワシナノキ** *Tilia japonica* Simonkai form *Stenoglossa* Hara しなのき、シナノキ シナノキの一品種

⊖ 北岳3192m

1. **キタダケトリカブト** *Aconitum* Sp. (仮称) おだまき、トリカブト 葉が極めて細かく分裂、花大形
2. **キタダケヨモギ** *Aster Kitadakensis* Hara et Kitamura きく、ヨモギ
3. **キタダケイチゴツナギ** *Poa glauca* Vahl *Var. Kitadakensis* Ohwi いね、イチゴツナギ 稈40—70cm
花序10—15cm
小穂5—6mm
4. **キタダケカニヅリ** *Trisetum Spicatum* Richter *Var. Kitadakensis* Ohwi いね、カニヅリ 全株無毛花軸及び小梗に短毛散生
6. **キタダケキンボウゲ** *Ranunculus Kitadakeanus* Ohwi きんぼうげ、キンボウゲ 全体無毛又は僅少花茎に2—4葉花1—2根出葉は三出掌状裂片は更に2—3片
7. **キタダケナズナ** *Draba Kitatakensis* m. (nsp?) あぶらな、イヌナズナ 茎、花梗に全部星状毛を密布する
- ⊖ 聖岳3011m
- ヒジリザサ *Sasa dimorpha* Muroi たけ、ササ
- ⊖ 仙丈岳3033m
1. **センジヨウナズナ** *Draba Sakuraii* Makino *Var. glabra* m. あぶらな、ナズナ クモイナズナに似て全体無毛
2. **センジヨウアザミ** *Cacalia Senjoense* Kitamura きく、アザミ 茎はクモ毛、葉裂片8対花1—3個
3. **センジヨウチドリ** *Orchis aristata* fisch *Var. Linearifolia* らん、ハクサンチドリ 大正10.7.25 小泉秀夫氏発見ハクサンチドリに最近縁種?
4. **センジヨウデンダ** *Polystichum gracilipes* C. Christensen *Var. Gemmiferum* Tagawa おしだ
5. **センジヨウスゲ** *Carex Lehmanni* Drejer かやつりぐさ、スゲ 鞘帯赤色、高所林内に稀産

E. 戸隠山 1911m (表山) 2315m (乙斐山) 2353m (高妻山)

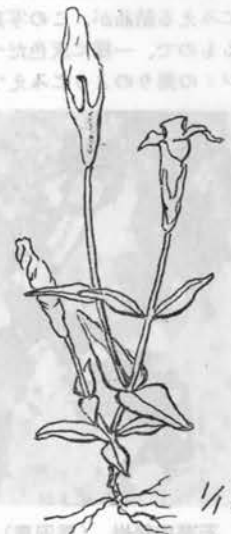
1. **トガクシオトギリ** *Hypericum Asahina* Makino *Var. Hisauchi* Y. Kimura おとぎりそう、オトギリソウ ダイセンオトギリと同一種
2. **トガクシシヨウマ (トガクシソウ)** *Ranzania japonica* Ito. or *Yatabea japonica* Maxim めぎ、トガクシシヨウマ 明治17年矢田部博士発見、全株帯粉白色、無毛、葉底心形花柱2.5cm帯紫色
3. **トガクシナズナ** *Draba Sakuraii* Makino あぶらな、イヌナズナ 全株星状毛を密生、ロゼット葉、花弁3.5—4mm短角は狭披針形種子、先端に尾状突起あり
4. **トガクシギク** *Cacalia Konoanum* Makino きく、キク 間種イワインチン×リウノウギク
5. **トガクシコゴメグサ** *Euphrasia inegnis* W. *Var. togakusiensis* Y. Kimura ごまのはぐさ、ココメグサ 葉の牙齒は鋭頭、苞葉の牙齒は芒端、ガク裂片は芒に終るもの
6. **トガクシデンダ** *Woodsia glabella* R. Br. おしだ、イワデンダ 基部より1/4位のところに関節あり、胞子のう群は裂片切こみの附近にあり
7. **トガクシタンボボ** *Taraxacum togakushiense* H. Koidzumi. きく、タンボボ 小泉秀夫氏の発見、命名ミヤマタンボボorタテヤマタンボボと同一種

8. トガクシタイゲキ *Euphorbia togakusensis* Hayata. とうだいぐさ
トウダイグサ 早田文蔵博士の発見、ハク
サンタイゲキと同一種
総苞葉は帯黄色
- F. 浅間山 2542m
1. アサマシダ *Diplazium Magofuki* Nakai おしだ、メシダ ナチシケンダ、ヨシケンダ
と同一種
2. アサマヒゴタイ *Saussurea nipponica* きく、トウヒレン
Miquel Var. *Savatieri* Ohwi
ダイトウヒレンの一変種
苞片は母種よりも細長い鋭
尖頭、茎は細い
3. アサマキスゲ *Hemerocallis Vespertina* ゆり、ワスレナグサ
Hara
花序は単純6分岐 3—15花
芒は線状披針形
4. アサマフウロ *Geranium Soboliferum* Komar. ふうろそう、フウロ
ソウ 茎葉柄に逆向する毛あり、
葉5角円形基部まで5—7裂
花瓣は下部に白毛散生
- G. 霧ヶ峯 高層湿原1500—1700m 車山1935m
1. キリガミネトウヒレン *Saussurea Kirigaminensis* きく、トウヒレン
Hara.
2. キリガミネヒオウギア
ヤメ *Iris setosa pallas* Var. *hondoensis* あやめ、アヤメ
Honda
ヒオウギアヤメに比し花大
内花蓋が針状でなく、ペン
状をなす点、昭和9.7 飛田
広氏発見、本田博士命名
3. キリガミネアサヒラン *Eleorchis japonica* F. Maekawa らん、サハラン
Var. *conformis* F. Maekawa
4. キリガミネスゲ *Carex Mcddendorffii* Er Schmidt かやつりぐさ、スゲ
Var. *Kirigaminensis* Ohwi
5. キリガミネアキノキリ
ソウ *Solidago decurrens* L. oureiro きく、アキノキリンソウ
form *paludosa* Kitamura
湿原中に極めて豊富に生育
湿原に入つたため、形態の
少しく変化した種、本田博
士命名後北村博士の改め
6. キリガミネタンポポ *Taraxacum hondense* Nakai きく、タンポポ
Var. *bisulcatum* H. Koidzumi
昭和11. 小泉秀夫氏発表全
株小又は中形、躍場の池附
近に多く生育
- H. 苗場山 2145m
1. ナエバキスマレ *Viola brevistipulata* Var. すみれ、スマレ
minor Nakai オオバキスマレの一変種
2. ナエバキイチゴ *Rubus Yabei* Leveille et ばら、キイチゴ 花部小梗に腺毛のない種
Vaniot form. *eglandulosus* Ohwi
(豊科高校教諭)



トガクシシヨウマ
Ranania japonica Maxim. J. Hb.
Yatabea japonica Maxim.

シロウマリンドウ
Gentiana Yabei J. et H



顕微鏡による岩石薄片の観察Ⅱ

岩石の構造 太田 昌秀

北アルプスに広く分布するみかげ石（花崗岩）と、東山にころがつて灰色の安山岩とは肉眼でも随分ちがつている。みかげ石の白さと、安山岩の暗い灰色の対照もはつきりした相違であるが、岩石を作っている結晶の粒に注意すると、そこにもはつきりした差がみとめられる。みかげ石では、数mm大の粗い粒がびつしりと組合つていて、1つ1つの結晶がはつきりと区別できる。これに比べて、安山岩では、何だか区別できない様に灰色な部分の中に、白い短柱状の結晶や、黒いずんぐりした結晶が、ちらばつて含まれている。このように、みかげ石は、全体が充分結晶質であるが、安山岩は白や黒の結晶以外の部分では結晶質ではない。みかげ石のようなものを完晶質の構造をもつ岩石、安山岩のようなものを、斑状構造の岩石という。

私達は、広くあちこちの山を歩いていると、このように構造の異つた岩石が、それぞれ特長のある産出の仕方をする事が判る。即ち、みかげ石のような完晶質岩石は、深いところでできたと考えられる岩石によくみられ、斑状構造の岩石は、火山岩に典型的に発達している。こうしてみると、岩石の構造は、その岩石のできた環境をかなりよく反映しているのではないかと考えることができる。こういうわけで、岩石を肉眼でみるときに、その構造に注意してみることは大切なことである。

顕微鏡で岩石をみるとき、このような岩石の構造は、とてもはつきりわかる。

写真の1は、石英肉緑岩という花崗岩（みかげ石）に近い岩石の顕微鏡写真で、全体が完晶質で、各結晶がモザイク状に組合つていることがよくわかる。

写真の2は、黒雲母を含む安山岩で、肉眼で白い斑点にみえる結晶が、この写真で大きな結晶として写つているもので、一様に灰色だつた部分がこの写真では細かいゴミの集りのようにみえている。

この2つの写真を比べてみると、肉緑岩は全体が結晶質ではあるが、1粒、1粒の結晶は、規則正しい形をしていないで、多角形の勝手な形をしている。それに比べて、安山岩の中の結晶は、きちんとした結晶の外形をはつきりもつている。肉緑岩のように結晶が自分の形をもつていないものを他形結晶と呼び、安山岩中の結晶のようなものを、自形性結晶と呼ぶ。

岩石を作っている結晶が、どうしてある岩石中では他形となり、他の岩石中では自形となるかということは、とても難しい問題であるが、誰にも気づくことで、岩石のでき方を考える上では大切な点である。

安山岩中の灰色の部分、写真2のゴミの集りのような部分は、岩石中の「ガラス」と呼ばれている部分である。同じ1つの岩石を作っている物質が、どうして一方では大型の結晶になり、他方ではゴミの集りのようなガラス質になるかということは、1つの岩石がだんだんと固つていく過程のいろいろな問題を反映している。

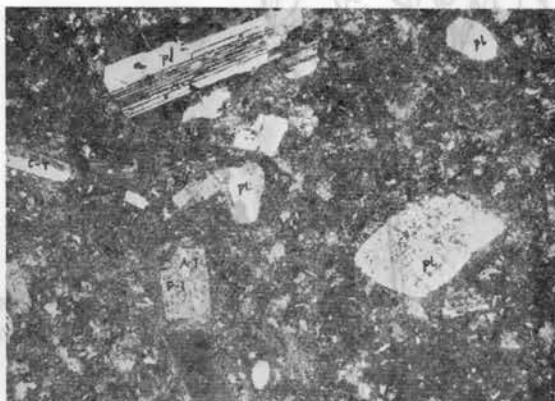
こゝに上げた2つの例は、教科書などで火成岩と呼ばれているもので、みかげ石（花崗岩）は深成岩の代表的なものであり、安山岩は火山岩（噴出岩）の代表的なものである。このように、山で産出する時の状態が異なる岩石（花崗岩は地下深くでできた岩石、安山岩は火山から地表に噴き出してできた岩石というちがいが）が、このように、岩石を構成している結晶の構造からみても、はつきりしたちがいをしめしていることは、岩石をみる時に、よく注意してみなければならない点である。

岩石には、この外に変成岩とか、堆積岩のような火成岩とは別のできかたをしたものがあり、それにはまた、それぞれの特徴のある岩石の構造がみられるが、この次には、それらについてみてみよう。

（北海道大学理学部地質学教室）



石英肉緑岩（燕沢産）×20 Crossed Nicol



黒雲母安山岩（雲松寺山産）×20 Crossed Nicol

稜北東岳ヶ爺

積雪期第二登攀 武田 睦男

爺ヶ岳は町の北西にあつて鹿島槍ヶ岳の南隣りに位置し、2669米の標高を有している山である。ピークが南峰、主峰、北峰と三つあり、その南面は比較的ゆるやかな尾根が南峰と主峰から白沢をはさんでのびており、春になると種蒔爺さんの現われるのもここである。一般にはこの辺をみて女性的な山だと言っているがいわゆる主峰の小冷沢及び北峰の小冷沢、西沢側は男性的なすどい山である。しかし隣の鹿島槍があまりにも立派過ぎ、またすべての岳人の注目をおびているのに較べ、こゝは或る一部の岳人のみ注目しているに過ぎない所である。爺ヶ岳東面というのはこの小冷沢側(すなわち信州側)を指して言う。主峰からは中央稜と言われる急峻なスノー、リッチがのび、北峰からは北稜と言われる急峻なリッチが小冷沢に落ち込んでいる。また冷尾根が北稜の上部に消えてなくなっている。冷尾根と北稜の間の沢から一ノ沢北稜、中央稜間の沢を二ノ沢、中央稜、東尾根間を三ノ沢と言っている。この二つの稜は1959年に初登攀されている。すなわち中央稜は4月2日、熊本大学山岳部がパーティによつて初登攀、5月3日には熊本R、C、Cパーティによつての第2登。また北稜は同日、同熊本R、C、Cパーティによつて初登攀がなされている。私達がこの北稜と中央稜の登攀に目を向け出したのが昨年東尾根の冬山を行つたときで立派な雪稜に思わず目を見張つたものであつた。未だ登攀のルートであつたのでいつそう興味がわいたのであろうか、いや……その後三ヶ月位の間に両方とも登られてしまつたがそれ程、失望したとも思わなかつた。私達には私達の初の登攀があるからだ……。三月に入るとようやく春らしくなり、春の休暇を利用して入山の登山者の数も次第に多く見られるようになると私達も安閑としていられなくなつてきた。そして一年有るも待ちわびた爺ヶ岳東面の登攀の日がやつてきた。3月12日、大町よりB、C(1960m)までは残り少い雪を味わいながら、ゆつくり一日かけて登る。テント、サイトにはミード型テント一張りと雪洞を6人がかりで建設し、北稜隊のC、L福島融氏と私の二人が北稜の取付き地点を見つけるために偵察を行つた。あとは明日の天気次第で成功するか否かの問題である。「北稜」夜中の12時頃バラバラする音に目をさます「ちきしよろ、雨だ」思わず大声で叫んでしまった。他の隊員達の失望の色もかくせない、大急ぎでテントにビニールシートをかけ雨よけを作るとまた落胆していつのまにか眠つてしまつた。やがて「どうやら天気も回復してきたようだぞ」という声に目をさます。さつそく朝食をすませ

て、3時半に出発する。ヘッドライトの明りを頼りに冷尾根最底鞍部の手前の尾根を小冷沢側へ下る、尾根の下部で行手をはぐまれる、また暗いのでツェルトを出して明るくなるのを待つた。

3月12日

6時にシュルンドの無数に入っている中を一の沢に降りきると両側から大小いくつかのデブリが見られた。早朝のしまり雪とは言え沢の中では気持ちの悪いものだつた。北稜の上部より二、三ルンゼ間の側より取付く予定であつたが三つ目のルンゼに入ると意外に登り易く、まだ1、2時間は雪崩の心配もないので高度をかせぐ為に一気に切り切ることにした。ルンゼの上部へ出るとあとは稜線まで広い雪面を登る。冷尾根の仲間が近くに見え、互いに「ヤッホー」のかけ声を交しながら北稜々線に出る、こゝの2回目の朝食はアルパイトの後でまた格別だつた。こゝから急なリッチ添いになり、一ノ沢側に雪庇が張り出し、ほとんど二ノ沢側を登つた。初登攀(5月)では二ノ沢側を登つたと言われる。上から二番目の岩場を右にトラバースして雪壁を突破するのに1時間有余を費してしまつた。一番上の岩稜は非常に瘦せていて張り出した雪庇の上をはうようにして乗越した。この二つが一番の難関であつた。あとは北峰まで同じようなピークが幾つもあり、併せて灰色の空と雪はより急峻に見せ、大きく張り出した雪庇は私達に疲労を感じさせた。午後3時半B、Cより12時間目によく頂上に立つた。帰途の冷尾根ルートが見つからず、冷小尾へ逃げてビバークと、翌日赤岩尾根を降つてB、Cに着いたときは全員がほつとした表情であつた。なお天候はほとんど吹雪であつた。(大町山の会会員)



会報きりぬき

キジの処置法

先月Tと烏帽子の奥壁を極め咽を渴かしてふらふら国境稜線を歩いていた、余りの暑さに耐えかねて、日影をさがしながら、Bルンゼのつめたあたりに来た時やつと一人一人入れる岩陰を見つけ何んの考えもなくもぐり込み一休みした。やつと腰を上げてTを呼んだ時異様な臭いがした、気がついた時には既に遅くキジなるものの真上に尻を乗せていたのだ。その臭いこと、さすがのTも顔をしかめるほどだった。肩の小nで処置せんものとするつとばしたが、何らその処置法を見い出せずやむなくそのまま済ませてしまったが廻りの人が不快な目で見るとな気がして小さくなっていた。幸いあとから四ルンゼパーティーが来たのでHからズボン借りてはきかえたが、その臭いが鼻について、食物のないまま夢中で西里尾根をかけおりにしてしまった。

何んと不快なこと。折角の感激も半減、Sのはなし(谷川の主が稜線上のキジのために新調の背広を汚して憤慨した話)を思い出して見知らぬ人に怒りを感じた…そこで小生考えるキジの処置法。まず人目につかぬところをえらぶことは云うまでもない。しかし人目につかぬといつてこの不浄物をむき出しにしたのでは何ものもない。昨年の北沢小nのように足の踏み場もないようではうかつに歩くことすら来出ない。又これにたかつたハエやブヨが我々の肌や食物にふれるのだ。そこでこの不浄物を完全に隠してしまうのだ。それは地の中にうめてしまえば良いだろう。その落下予定地点に穴を掘り完了の後、穴をふさげば万事オーライ、誰が見てもきれいと言うものだ、何も手で穴ほりをしなくても、靴の先を使えば別に手もよごれないだろう。二、三度やればすつかり馴れてしまう。目に見える物をきれいにすることはだれにでもできること、目立たぬものからきれいに私たちの山を美しくしようではないか。

(東京北稜山岳会 No.25より)

蛙の足の話

蛙の足と云つても生物のことではない。話しは昨年冬期合宿の時のこと、初めての冬山で私は想像もできない装備に困って同行するはずだったK女史にいろいろ親切におしえていただいた、ミトンやオーバースポーンはすぐできたが苦心したのがオーバースポーンだった、散々ためしたあげく結局ダボッとした袋みたいなのを足首でしめるものをこしらえた。さて北沢峠の第1日はテントキ

ーパーだった。マイナス20度の痛いような寒さの中で、小川の水で米をとごうとしたら指がちぎれそうで驚いたり、万年筆のインクが凍って書けなかったり、又テントの中の雪をはきだして床を平にしたり、食糧の整理等とた。自家製のオーバースポーン靴をすつぱりおおつていた忙しかつし、防水がきいていたので、非常にあたたかく具合が良かった。午後になつて後発のI氏は私のオーバースポーンを見て「蛙の足」と命名されたらしい。しばらくして「蛙の足」を是非拝見したいという人が現われて、私ははじめてその間の事情を知り大いにファンギした。しかし成程よく見れば適切な表現である。くやしければ登山靴の上にはいた格好はガマの足そつくりなのだ。それに黒いキャンパスという色もまずかつた。物置にほうりこんでおいたら、くづ屋にうられてしまつて今は片方しかないが、アレだつて足首にジッパーをつけ、つま先の形をなおしたら、もう少しスマートなものになつたらうと思ひ、今度機会があつたら又作らうと思つている。

(市川うら子 横浜山岳会会報より)

ぼうけん

この夏はどこからどこまでバスが延長され下駄ばきでも海拔何千何千mまで登山ができる。誰もが手軽に登山出来るのはよいが、本当の登山を知る我々にとつては悲しむべきことである。このような記事は山岳雑誌や山岳会誌等に良く見かける。純真なクライマーの中には何々の志士のようにヒンコウガイする人もあるが、この原因は何んだらうとつきとめただらうか、電鉄会社や地元の金もうけもあるが、そのもう一つ根本はやはり、人多く仕事少ない日本のなやみではないかと私は思う。普通のことと同業者が過剰で共倒れ——何か新しいこと——山でもとなるのだらう国土のあらゆるものを戦力と化して……の本土決戦から12年たつたが、今は国土のあらゆるものを商品と化して…本土商戦というところか、本土商戦は免れたが、本土商戦でメチャメチャにならなければ良いが。/(京都趣味登山会報 No.14より 河合英一)

合宿に笑話はずきものだが「おしめ」をあてて谷川合宿に参加した新人がいたのは珍らしい、おねしよするかと思つたら滑落停止で尻のぬれるのを防ごうと考えたらしい、ビニール製であつた。

日頃剛毅をもつて鳴る某リーダーもねずみには弱い、いやねずみの死骸に弱いらしい、谷川合宿でパンを食い荒したねずみ小僧を死刑にして、死体をほうつたら、運悪く彼氏にぶつかりそうになつた。その時の悲鳴たるや、。(東京都庁山岳部報 155号より)

たべもの話

忘れ得ぬ昭和15年大阪の下宿住いの思い出。正月は大山から4月の白馬迄、会社勤めの土曜半どん、日曜、特休を初めて36回のスキー行はほとんど夜行列車の洗面所までまどろむ程度で、不眠不休の頑張り方でした。山陰の背後で裸ツアーをやり、零下20度の志賀高原ツアーでふるえ上がったものですが下手は技術も真正面からぶつかって行つたおかげで、シーズンオフの頃には何んとか上達したものでした。冬山の寒さをしのぎ最上のコンディションを発揮するためにどうしたら良いか、これは始終頭から離れなかつた問題でしたが、初の大山では、牛かん、氷砂糖、マホービンにつめた熱いブラジルコーヒー、角砂糖、あめ玉、キャラメル、セーター、真綿、ジャンパー、ヤッケ、とリックにつめきれないホワイトの引越のような荷物でしたが、修業がつんで3月頃には梅干入の玄米にぎりめしと、沢庵、ヤッケと下着半の着替えだけで簡単になりました。8月富士登山も土曜どんを済まして大阪から特急にのつて富士の頂上に登り月曜日の朝はいつものように出勤といった調子でした。9月半から三井物産が満州に紡績工場を新設するので9月中旬満州各地の視察旅行に出かけましたが10月初旬奉天の夜、零下1度まで下がる寒さは合服の身にこたえましたが、満人は一体何を食つてこの寒さに耐えるかの研究をマスターしました。満州から帰つて酒量も相当な程度に上がりましたが、12月初、急に41度の高熱で寝こみましたが、2階から便所へ、とここ降りて行くという頑張りは急性肺炎を悪化させ遂に国許の両親に危篤の電報を打つ騒ぎとなり、半年の入院を一年余の会社を休んで静養し、病気に使つた金は当時大阪商船で世界一週運賃(食事、小使い共)を越す有様でした、親、兄弟、会社をはじめ周囲の人達を煩した迷惑を考えると山へ行くのも概にしたらどうだと皆から散々いわれたものでした。一般スポーツと同様、山行きが健康増進を一つの大きな目標とする以上、体力の消耗と栄養の補給とをいかにマッチさせるかはすこぶる大きな技術ではないでしょうか。暖たかい瀬戸の潮風に育つた我々が、雪深い山奥に這入つて相当激烈な運動と消耗に耐えつづけ、しかもレコードを更新し好調を持続させるには一体何をどれだけ、どうして食つたら良いのか、こうした食物の研究と真剣にとつて行く必要があると思ひます。岩場のザイルさばきを研究し、谷歩きを学ぶと同様に食物というものがある程度重大なものか実際にためしてみる事です。私は15年間食物によつて健康を左右する方法を研究し、自分の大病を治し、しかも健康への道をはつきり握ることができました。ヤセ尾根の縦走で、木の根に足をふみはずしたり、一寸とした石コロでスリッパしたりするのがその朝のみそ汁のジャガイモを食べたのが原因だといつたら皆さんおどろかれるでしょう。草いきれする堂ヶ森の縦走で汗を出さない方法——これ

はほんの一例です。食物の正しいえらび方と取りあわせと取入れ方だけで健康を確立する方法です。だから病気を治す方法でもあるわけです。これは現代医学の否定する漢法医学に源を発した東洋的な物の考え方を根底にしております。本当の自由と幸福を生みだすことの生活法でもあります。この健康法を一ヶ月確実に実行すると、すばらしい生理的变化が起こります。まず第一に頭がすつきりして来ます。二、記憶力がうんと冴えて来る。三、つかれがなくなる(朝早く目がさめる、風邪を絶対にひかなくなる)四、根気がいくらでもつづく。五、夢を見なくなる。六、判断力が敏速になる。七、実行力が大きくなる。八、作業能率がぐつと上る。九、御飯がおいしくなる。これが私の云う健康です。半年もつづけると毎日の食べものと飲みものの質と量の正しいかどうか自然にわかつて来て、秩序づけが段々と上手になって来ます。

甲 邪食(これはうんと控えるか、すつぱりたつてしまいなさい)

1 肉、魚、玉子、鳥等をやめる(菜食主義) 2、水分を出来る限り少なくすること(1日のうち4回以上小便には決して行かない程度にせよ) 3、果物、サツマ芋、ジャガイモを食べるな。 4、甘いもの一切厳禁
2 基本食(毎日の食事は、次の食事にしたがうこと)

1、半つき米(なるべく玄米)麦飯(麦は半分以上)粟、きび、そばを主食とせよ。2、お菜は時候の野菜を用い、ゴボウ、レンコン、ニンジン、ダイコン、ネギ、タマネギは特に良い。3、味つけは塩と油塩は漬物用、油はゴマ油、タネ油、白絞よし、市販の醤油はアミノ酸入りで悪い。市販の味噌も余り感心しない、ソースもいけな 4、なるべく加工食品をとるな。5、酢と、すつぱいものはとるな(市販の醋酸酢は絶対に悪い) 6、出しこんぶ、わかめ、イリコは使つて良い。

7、一口は30回かむこと。8、主食を3、4にしてお菜を1にせよ。こんな簡単な金のかからないどこでも誰でも、いつでもやれることを正確に実行できない位なら山行はあきらめた方がよろしい。砂糖や果物で疲労が回復されるといつた、栄養理論を捨て去らぬ限りその末路は病魔の餌になるだけでしょうから。「そんな粗食では、健康が保てない」と云われる人へ——

この反対はずいぶん大きな力で君をゆすぶります。しかし現代栄養学者の云う通りのカロリーがぜひと必要なら貧乏人はみな一生みじめな生活をしなければならぬことになる。美食、大食、邪食、甘いものの犠牲になっている人のいかに多いことか、これらの誘惑に負けなことが、とに角大切です。(愛媛細菌研究所 愛媛山の会 奥田昇)

御恵贈いただきました会報の中から原文のまま切りぬいてみました。敬称は略しました。今後とも継続して行きたいと思ひます。

各地の民芸品

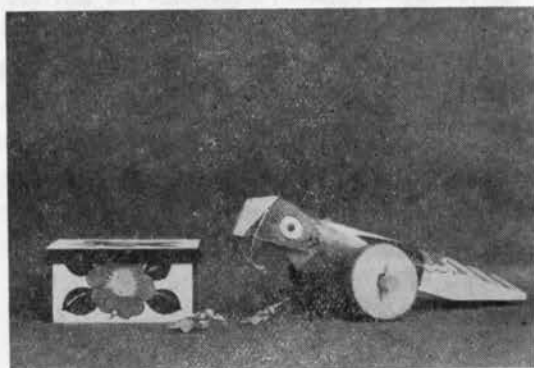
キジ馬と香箱

熊本人吉市

これは昨年度、お国自慢全国民芸展を催した際に各地よりご寄贈いただいたものである。本号より順次継続して掲載して行きたい。

人吉の奥に落ちついた平家の落人の手すさびに作ったものだといわれている。

キジ馬とよばれる子供のおもちやであるが、馬とはひく車の意味と、動くところからつけた名称であろう。香箱と一緒に古くから売つて来たおもちやで、キジ馬は男の子に、香箱は女の子にといったわけで、ともに華やかに色彩されているが、哀愁の深いおもちやとして愛好家に喜ばれて来た。



キツツキ

長沢 修介

三月とはいつても信州はまだ冬、気まぐれな低気圧はまだ思わぬ大雪を降らせることがある。そんな時今迄の暖かさで開き始めた花の蕾や草の芽はどうしようかと思案顔、南からぼつぼつ帰つて来たヒバリやキセキレイなどの漂鳥は寒さをしのぐ場所を見付けることも出来ずふるえている。二、三日もそんな寒さや吹雪が続くと凍死するものさえ出て来る。

一年中この土地で冬を越した留鳥はそんな時は何処に身を潜めたら良いかちやんと心得ていて寒さをしのぎ餌のあり場所も知っている。留鳥であるキツツキの類のアカゲラはそんな時には人家の庭先迄も飛来し梨や栗の大きい木の木肌をつついてはいる。キツツキは本当に森林にのみ生活する鳥であつて森林保護者とも言うべき有益な鳥でありその体も森林生活に適した様に出来ている。足の指も前後に二本づつに分れていて木を登るのに都合よく出来ており尾羽は普通の鳥よりもずつと強くそれは木の幹を登るのに体重を支え足の補助をする。又あの強く太い嘴は木の幹をあちこちと打診してあるきこぞと思つた所を思い切りたたき穴をあけ「モリ」の様になつた舌で

中の虫を引き出して食べる。この様に全て森林で生活する様に出来ているので最近の森林の代採で昔より多く見受けることが出来なくなつたのは悲しいことである。



会報集まる

当博物館の山岳図書室充実計画の一環として行なわれている山岳団体機関紙収集にあつては全国各地の団体の御協力が得られ、現在下記の団体から会報がとどけられております。ここに紙上を借りて厚くお礼申し上げますと共に一層の御援助をお願いいたします。

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。
大町山岳博物館

機関紙を寄贈された団体(カッコ内は誌名敬称略)

東京緑山岳会(登攀) 玲峰グループ(玲峰)
鎌倉石楠花山岳会(石楠花) 八幡製鉄所山岳部(部報、登山20年史) 北海道学芸大学山岳部(部報) 同志社大学体育会山岳部(DAC報告) 横浜山岳会(山ぐる一ふ、ふみあと(ふみあと) 岐阜登高会(かもしか) Bush山の会(Bush) 中央気象台山岳部(溪流)

山と博物館 第5巻第3号 1960年3月25日発行

発行所 長野県大町市 TEL(大町) 211

大町山岳博物館

印刷所 長野市岡田町 176

第一法規出版株式会社